

『欲望と言う名の電車』

—主人公ブランチの破滅—

佐々木 愛

テネシー・ウィリアムズ作『欲望という名の電車』(A Streetcar Named Desire) は主人公ブランチ・デューボアと、他3人の登場人物がニューオーリンズのアパートで繰り広げる舞台作品である。現在有名な映画は舞台作品を映画化しており、現在でも名作として残っている。ブランチは故郷の大農園を失い、心に傷を追っていた。途方に暮れたブランチは、ニューオーリンズに住む妹の家に転がり込み、ここで人生をやり直そう、前向きに生きていこうと決意をした。しかし、ブランチの過去とニューオーリンズの環境がブランチの心の闇をよりいっそう深くし、結局自分の理想の世界と現実の世界の区別ができなくなってしまう、精神病院送りになってしまう。ブランチは幸せを求めていただけなのに、なぜ破滅してしまったのだろうか。ブランチの過去及びニューオーリンズ、ブランチを取り囲む人々からの影響をあげていきたい。

物語が進むにつれ、ブランチの過去が少しずつ暴かれていく。ブランチは大農園の娘として生まれ、何不自由なく暮らしてきた。未亡人であり、学校の教師をしていたことも明かされている。夫が亡くなっていることは冒頭でステラの夫であるスタンリーとの会話でわかる。映画では描かれることがなかったが、原作でブランチの夫は同性愛者という設定になっている。ブランチは夫とダンスをしている時に同性愛者であることを目撃し、汚らわしいと夫に囁いた。夫はその場で外に走りだし、銃で自分の頭を撃ちぬいてしまった。この出来事は彼女が自分の一言で夫を殺してしまったという罪の意識を根付けたのではないだろうか。その後彼女は自分の家である大農園を失い、夫を殺してしまった罪悪感をかき消そうと、大勢の男性と夜を共に過ごした。彼女の勤め先の高校でついに17歳の少年にまで手を出し、教師の職と、居場所を失い、途方に暮れ妹に頼るシーンから物語が始まる。

彼女はまた、過去の栄光とプライドが捨てられず、現在と過去を別に考えることができない。心機一転するつもりでニューオーリンズにやってきたのに、ニューオーリンズは彼女が思い描いていた新天地とはかけ離れており、新しい環境に馴染むこともできなかった。

妹のステラの旦那であるスタンリーも彼女に大きく影響を与えただろう。彼はブランチのお高くとまった態度が気に入らず、ブランチもスタンリーの暴力的な行動に怯えていった。ブランチはスタンリーのことを野蛮で、妹のステラにはふさわしくないとすら話しており、スタンリーはブランチの行動にいちいち文句をつけていた。物語の終盤、ブランチはスタンリーの同僚で友人のミッチから求婚される。ブランチにとってミッチは紳士的であり、ニューオーリンズでの慣れない暮らしの中でも希望の光になっているような存在だった。しかし、スタンリーは友人であるミッチがブランチと結ばれることをよしとするわけがなく、ブランチに野蛮と言われた報復もあったのだろうか、ミッチにブランチの過去を暴いてしまう。ミッチはブランチに愛想を尽かし、人生のやり直しのチャンスを失ったブランチは妄想が激しくなり、ラストシーンでは妹のステラに支えられながら精神病院へ向かう。

ブランチは冒頭で『欲望』という名の電車に乗って、『墓場』という電車に乗り換えて、6つ目の角でおりに言われたのだけど——『極楽』というところで。』と言っている。これはニューオーリンズのステラの家に行くための道のりだが、この駅の名前はブランチが経験した過去を暗示しているのではないか。彼女の欲望は止まることなく走り続け、彼女は破滅してしまった。新天地は彼女の破滅を止めることができず、新しい環境はむしろ電車に勢いをつけてしまったのではないだろうか。ブランチが欲望に負けてしまったことはもちろんだが、私はブランチが欲望を持ったままニューオーリンズに行ってしまったことが、彼女が破滅してしまった理由だと考える。

(指導教員 中村敦志)